

良い日本語教科書の条件 — 『新概念日語Ⅰ』 出版にあたり —

楠本 徹也
(2002.10.31 受)

【キーワード】 『新概念日語Ⅰ』 自然さ 実用性 学習者心理 受容性

0. はじめに

2002年9月、中国において日本語教科書『新概念日語Ⅰ』（楠本徹也・李若柏主編、北京出版社）が出版された。本稿はその『新概念日語Ⅰ』の特徴を述べる傍ら、良い日本語教科書の条件を探っていくことを目的とする。

中国では各教育段階において一定の「教学大綱（シラバス）」があり、それに沿ってつくられた日本語教科書が多く、多くの教育機関において使われている（国際交流基金ホームページ『日本語教育国別情報』国別一覧《中国》参照）。また、それとは別に、市販教科書では『中日交流標準日本語』（人民教育出版社・光村図書出版株式会社合編）が広く使われている（岡本・張2000:65）。この教科書は、「練習」の部分が少なく、また、コミュニケーション能力を付けられるようになっていないなどという不満を耳にすることはあるものの、中国における日本語教科書の中で圧倒的シェアを誇っている。

このように中国での教科書事情は、競争的環境には程遠いながらも、需要に対する供給は満たされているといえるだろう。しかしながら、それにもかかわらず、良い教科書を渴望する声が現場の中国人日本語教師から聞かれる。具体的には、現代の日本社会に合うような語彙・表現・内容の刷新、文法項目の合理的・系統的配列、そして会話能力の強化を教科書に求める声が高い（楠本1996:158-60）。これらは教え方の問題に繋がることでもあるように思えるのだが、教科書への依存度が高い中国の日本語教育現場（楠本 前掲書 pp.157-8）では、やはり教科書自体に問題解決が託されることとなる。その問題解決が動機となり『新概念日語Ⅰ』が生まれた。

競争がなければ良いものは生まれにくい。ある意味で教科書の評価は市場が下すといっても過言ではないだろう。しかし、それには量的に「教科書を選択する余裕」（岡本・張 前掲書 p.65）がなければならない。その余裕をつくりだす一助

となり中国の日本語教育の質的向上に寄与することを旨として、『新概念日語Ⅰ』は、中国の教科書市場へ“殴り込み”をかけた。

1. 『新概念日語Ⅰ』の特徴

1.1 概略

『新概念日語Ⅰ』は本冊（全40課、524頁）と練習帳（全172頁）それぞれ1冊ずつ、そしてテープ11巻から成る。テープはプロのナレーター及び声優の卵たちにより吹き込みが行われ、練習部分には学習者が自分の声を吹き込めるように十分な間がとられてある。また、テープの中の各練習全ての言い出し部分で「第○課練習△」というように言っているため、テープの途中でも何課のどの練習かが分かるようになっている。

『新概念日語Ⅰ』は中学生から大学生、そして一般人までを対象とし、学校での授業で使う他、自学自習ができる構成になっているので個人学習もできる。レベルは初級で、一般的な初級シラバスにおいて動詞のレル・ラレル形が出る前までを範囲としている。日本語能力試験4級～3級前半の語彙・文型が網羅されている。将来的に当教科書は上級レベルまでを目指しており、全部で4巻になる予定である。

1.2 特徴及び従来の教科書との違い

1.2.1 自然で実用的な日本語

『新概念日語Ⅰ』は習ったらすぐ使えるように実際のコミュニケーションに役立つ日本語を学ぶことを目的としているので、本書の中の日本語は全て、自然で実用的、かつ日本人と友好的人間関係が築かれるようなものになっている。他の教科書に見られるような文型習得のための不自然な日本語（例えば自己紹介の際の「私は田中です」など）や子供じみた日本語（例えば日常的な質問として「今朝何を食べましたか？」など）は排している。但し、自然だからといって、難易度や導入量を無視した導入はしていない。

文型提示は単文ではなく必ず対話の形で提示し、談話レベルでの理解を施している。練習においても、単純な語句の置き換えや活用変化の練習をなるべく避け、常に対話で練習できるようになっている。そして、既習文型を使ってタスク活動をするようにもしている。総じて、文の構造よりも使い方に重点を置いているのが特徴である。

1.2.2 学習者心理に基づく学びやすさ

学習者が余裕を持って覚えられるように最初は導入する語彙や文型の数を少なくし、学習するにしたがって徐々に導入量を増やしていくように配慮した。各課の構成も、最初いきなりダイアログをもってくることを避け、「語彙→文型→説明→ダイアログ」の順で学習者の学習過程に合わせており、彼らが学習しやすいようになっている。最初の10課では平仮名を覚えながら、日常の挨拶表現を学ぶ。その際、発音の手助けとしてピンインを基としたローマ字表記を採用した。また、単語には全てアクセントを示した。

全体を通して、専門的文法用語や言語学的知識を要するような説明をできるだけ避け、だれもが理解できる内容になるようにした。日本語部分の中国語訳も不自然な直訳を避けできるだけ自然な中国語にしておき、正しい意味や用法の理解を施している。説明は詳しくなされているので、教師は教室において説明に時間をかけることなくコミュニケーションを主とした練習に専念できる。

1.2.3 文化や社会に関する情報の多さ

言語と文化は切り離せないものである。本書では、日本人との文化的摩擦が起きないように、日本の文化や社会に関する情報を数多く入れてある。特に日本人の価値観や行動様式（例えば、直接的物言いの回避、ウチとソトの意識、丁寧さと謙虚さなど）に関して詳しく言及している。その際、日中間における言語や文化の違いに焦点をあて、中国人学習者の理解が促進されるようにしている。

1.2.4 身近で最新の話題

各課は中国人学習者の身近な話題を中心として場面が構成されている。また、“Eメール”“インターネット”“ホームページ”“携帯電話”などの語彙を導入し、現代にマッチした内容となっている。なお、当教科書の第1巻では中国での生活を描いており、第2巻以降では舞台を日本に移し日本での生活での場面設定となる予定である。

1.2.5 日本語能力試験に準拠

当教科書はそれぞれの巻において日本語能力試験各級の語彙・文型が全て網羅されるようになっているので、試験対策にも役立つ。なお、各級の語彙・文型に関しては国際交流基金と(財)日本国際教育協会の著作・編集による『日本語能力試験出題基準』（凡人社、1994年）を参考とした⁽¹⁾。

1.2.6 その他

当教科書はダイアログや練習部分にイラストを多く使用している。その際、幼稚なまたは“マンガチック”なものやあまりにも個性的な描き方をするものは、

一般の大人が使う教科書として相応しくないとの判断で避けるようにした。また、人物などに対してステレオタイプ的な描き方をしないように気をつけた。

最後に当教科書独自の試みとして2点挙げたい。一つは、当教科書には日本の歌を載せているのだが、その際、楽譜を中国式にすることにより、見て歌いやすいものにした。二つ目は、最後の頁に日本の日本語学校と出版社の広告を載せたことである⁽²⁾。教科書への広告掲載はかつてないことであろう。しかし、学習者にとって有用な情報が得られるという点で、また、広告主にとってはたくさんの人が使用する教科書は広告媒体として魅力あるという点で、メリットは大きい。市場性を睨んでの試みである。

2. 『新概念日語Ⅰ』本冊の構成

『新概念日語Ⅰ』本冊において各課は以下の構成になっている。

【本课所学内容】

「こんな時どういったらいいか」という視点より、学習者がこれからどんなことを学習するのか把握できるように、その課の学習目的が述べられている。

【重点】

その課に出てくる主な文型をリストにしている。

【新出词汇】

その課で新しく出て来る語彙のリスト。日本語の表記は最初からルビ付きの漢字を取り入れている。各語にはローマ字または仮名で発音を示している。その際、アクセントをおくところを太字にした（例 来^きます：[ki・ma・su] または [き^きます]。但し、「^き②来ます」のように番号で示すところもある）。

各課においては新出語彙を量的に制限している。最初の10課は10ぐらいに、そして徐々に増やしていき後半部は1課につき35前後になるようにしてある。なお、学習者が必要に応じて覚えたり参考にしたりすればよい語彙を〈参考語彙〉として別に出してある。

【基本会话】

その課でマスターすべき基本的表現。各課に4つぐらいある。これらは実際の使い方が分かるように全て対話の形で出している。

【解说】

各【基本会话】における文法などを中国語で説明している。分かりやすく説明することを心掛けた。そして、学習者が学習事項を正しく使えるように、豊富な

例文とともに語用論的視点からの説明を主としている。例えば、自己紹介における「～と申します」と「～です」の違いについて、丁寧さの違い以外にもどういふ場面でどちらを使うかというような説明もなされている。

【練習】

習ったことが実際の場面において流暢に出るように様々な練習をする。ほとんどの練習は対話形式でなされ、単なる代入や置き換えの練習はなるべくしないようにしてある。イラストなどでの視覚情報も多く使っており、実際的な場面設定での練習ができるようになっている。また、既習事項を応用したタスク活動も練習として入れてある。なお、練習自体に専念できるように各練習において新たな「新出語彙」は入れないようにしてある。

【対話】

第11課より各課ごとに、まとめとしてダイアログがある。各ダイアログは暗記して流暢に会話できるようにすることを目的としている。

【读音练习】

仮名文字や漢字の導入と読みの練習及び発音練習を目的として、その課で出てきた新出語彙を挙げている。

以上が各課の構成であるが、他に以下のような課がある。

【序章 日語的特点】

第1課に先立ち序章として、日本語の特徴を発音、文法、表記の面から概説している。日本語の会話は省略が多く「私」「あなた」は普通は言わない、人への感謝や謙遜的態度が言葉に表れることが多いなどということまで説明している。ここでは、日本語とはどういう言語なのか予め知っておくことで本課への導入をスムーズに行うのが狙いである。

【复习】

10課が終わるごとに「復習」の課がある。問題に答えることによって、それまでの既習事項が習得されているか確認できる。なお、「復習」には聴解の練習も含んでいる。

【阅读文章】

まとまった文章を読む練習。未習の語彙や文法事項を少しながら意図的に入れている。しかし、これらは既習事項から意味が類推できるようになっている。

【日本文化与日本社会】

日本の文化や社会事情を紹介し説明している。中国人の目から見て述べている

ところが特徴的である。取り上げた題材は以下の通り。

(1)日本人の挨拶 (2)日本の教育制度と学校生活 (3)“感謝”と“お詫び”の概念 (4)日本人の家と日常生活 (5)日本の貨幣と経済、ビジネス習慣 (6)日本のスポーツ (7)日本の産業と科学技術 (8)日本の食生活と飲食業 (9)日本の祭りと伝統行事 (10)日本人の処世術

また、これらとは別に、最初に日本の国土や人口についての紹介がある。原稿では地図を入れていたのだが、どういうわけか印刷されていない。

【轻松一刻】

“ちょっと一息”の意味。勉強の合間に歌や折り紙で頭と体をリフレッシュするための欄。

3. 良い日本語教科書の条件

ここで、日本語教科書のあり方に関して考えてみたい。『新概念日語 I』は構想を練ってから出版まで4年間かかっている。その間、既存の様々な教科書を分析し当該教科書作製の参考とした。そして、編集作業を通して常に「良い教科書とは何か」と自問してきた。そこで感じたのは、良い教科書とは結局は学習者にとって学びやすく役に立つ教科書であるということである。「学習者にとって学びやすく役に立つ」とはどういうことなのか、以下具体的に述べる。

3.1 導入項目の量的制限と質的保証及び体系的配列

まず、一つの課に新しく導入される語彙や文型は量的に制限されなければならない。例えば、最初の課に30も40も新しい語を導入したら、初めて日本語に接する学習者の負担は大変なものとなろう。外国語学習はある程度暗記が強要されることは仕方ないことかもしれない。しかし、最初は学習者の負担をできるだけ軽くし、少ない語彙でもコミュニケーションができる喜びを与えた方が習得上効果的である。そして、課が進むにつれて、導入量が増えていくのがよいであろう。それでも、一つの課での導入量は学習者にとって大きな負担にならないようにしなければならない⁽³⁾。役に立つから、自然であるからと言って、関連語彙を何でもかんでも導入していいわけがない。もし、専門科目名（法律、経済、経営など）のように関連語彙が量的に多くなる場合は、それらを選択語彙とし、学習者が各々関係するものだけを覚えるようにするとよい。

次に、導入される項目は質的に保証されていなければならない。それにはまず、教科書で提示される日本語は自然なものでなければならない。自然な日本語とは、

日本人が実際に話したり書いたりする日本語である。文型重視の名目で自然さが犠牲になってはいけない。多くの教科書の最初の課にあるような「私は～です」「あなたは～ですか?」のような日本語はもういい加減やめてほしい。どういう日本語が自然か不自然かは学習者自身には分からない故、学習者は教師の発話や教科書に書いてある日本語に全面的信頼をおいているのである。実際に使われない日本語を覚えるのは時間の無駄であり、何よりも学習者の信頼を裏切ることになる(楠本 1995:71)。第二に、語彙や内容の永続性と一般性がある。世の中が速いテンポで変化している中で、時代遅れとなったり永続性が保証できなかつたり、また、一般的ではなかつたりする語彙や内容は要注意である。但し、「CD」「インターネット」「携帯電話」などの現代的な語彙の導入は大いに奨励される場所だが、世界の中ではこれらが人々の間で一般的にはなっていない地域もあるので、注意を要する。中上級になると、内容に対する永続性と中立性がより問題となるだろう。現代事情の変化や価値観の多様化に耐えうるだけの普遍性をそなえた内容が求められる。

導入項目の量的制限と質的保証の他に、学習者が学びやすいように体系的な導入がなされることも必要である。全体を通して易から難へ積み上げていく、近似する意味・用法を一緒に導入しない⁽⁴⁾というようなことは教える際の原則として誰しも認めるところだが、その他に、教え方との適合性も考えなければならないだろう。例えば、直接法で教える場合、人が認識しやすい名詞的概念を含むものを最初にもってきて、それを基として意味を拡大していくのがよいだろう。欲求表現を直接法で教える場合、「Nが欲しい」を最初に導入して、それから、「Vこと+欲しい」とし「Vたい」を導くようにするといったようなことである。人の認知作用において「モノとかコトにあらわされる」ような「実体的概念」が優先されることが認められ(楠本1999:103)、それが学習者の習得プロセスに反映されるものとする。このような学習者の認知手順に沿った文法配列が、教科書に求められるのである。

学習者の学習過程や習得能力との適合性も考えなければならないことである。多くの学習者は単語から文型、そして会話へと学習を進ませるであろう。教科書もそれに沿った配列がなされていると、学習者にとって学びやすいのではないだろうか。また、学習者の習得能力に対する配慮も必要である。導入項目の量的制限が必要なことはもちろんのこと、理解・記憶を確かなものにするために教授項目における各課の連関と連続性が求められる。会話本などに見られる単発的なモ

ジュール型の構成では、持続した記憶保持には役立たないであろう。

日本で使われている日本語教科書の多くは最初から仮名で表記されている。学習者は教科書の第1課に入る前に、まずは仮名を覚えなければならないのである。しかし、一度に平仮名と片仮名を合わせて92の文字を覚えるだけの大変さと退屈さを理解している教師はどれだけいるだろうか。『新概念日語Ⅰ』では挨拶などの日常的な表現を覚えながら徐々に仮名文字を導入しており、最初の段階において、学生の日本語への興味を文字の暗記で失わせないようにしている。その際、発音の手助けに一時的にローマ字表記を用いている。このローマ字表記はあくまで便宜的で、仮名が全て導入された後は使われないが、学習者にとって日本語の音韻構造を理解する一助ともなる。

3.2 受容性と学習効果

教科書の「学びやすさ」を測る他の要素として学習者の教科書に対する受容性がある。この受容性は外的受容と内的受容に分かれる。外的受容とは、外から見ていかに見やすく読みやすいかということである。字の大きさやレイアウト、そしてイラストの有無が関係してくる。文字だけの教科書が、それがどんなに素晴らしい内容であっても、いかに読みにくく無味乾燥なものに見えるか、ここで指摘するまでもないだろう⁽⁵⁾。外的受容とともに内的受容がある。内的受容とは内容が学習者に受け入れられるかということである。これは内容面での読みやすさや面白さが関係してくる。教科書の中で取り上げる題材が学習者にとって身近で興味が持てるものであるならば、学習者に受け入れられ、学習の動機付けともなる。イラストも同様にあまりにも子供っぽいものやステレオタイプのものは大人の学習者にとって抵抗感を感じることであろう。

内的受容に関して最も大切なことは、イラストを含めて内容的に、ステレオタイプを助長したり偏った見方がなされるものは避けるということである。ましてや差別的内容に至っては言語道断である。時折既存の日本語教科書に偏見や差別を含む内容が見られる⁽⁶⁾が、様々な境遇の学習者がいる中で我々日本語教師は十分に気をつけなければならない点であろう。

次に教科書が学習者に「役に立つ」にはどのような要素が必要か考えてみる。教科書が「役に立つ」ものであるかは、その教科書からいかに学習効果が得られるかにかかっている。それには、学習者のニーズとの適合性が大切なことは言うまでもないが、教科書における各学習事項が実際のコミュニケーションに発展的に応用できることが大切である。ここでは各課の連関と連続性が必要となる。モ

ジュール型の完結された構成では、個々の場面への対応はなされるが展開性がないため実際的コミュニケーションへの応用がなされにくいということがある。各課における会話も、機能的場面对応型の短いダイアログではなく、ある程度の長さを持った内容のあるものが望まれる。またさらに、実際のコミュニケーションへの応用がなされるためには、日本人の価値観や行動様式を理解し身につけなければならない。それが可能となるような内容設定が教科書に求められる。

4. おわりに

おわりに『新概念日語Ⅰ』の問題点を挙げる。問題点は技術的なことである。当初、原稿を中国の出版社に渡す際にオフセット印刷するように要求したのだが、ほとんどの部分が中国においてパソコンで再編集され、それで印刷された結果、文字のフォントが違ったり、文字化けしたり、ローマ字や日本語の表記が違っていたり、原稿にはなかった表記ミスが少なからず存在してしまっている。今のところ正誤表での対応を考えている。第2版からは校正を厳しくしていきたい。また、初心者にとっては日本語の文字が小さく、特にルビが読みにくい。文字を大きく読みやすくするよう、レイアウトとともに考えていく。

当教科書は作製において公的な資金援助をどこからも受けず、まさに「日中の先生方が献身的に協力してできあがった手作りの教科書である」（楠本・李2002: 2）。出版においても、日本からの資金援助なしに中国の出版社が自ら出版したものである。教科書作りは大抵は大掛かりなプロジェクトとなっていて、金がなければ何もできないのが現状である。当教科書はそれに対する挑戦でもあった。日本での出版物のような立派な製本とはならなかったが、内容で勝負したいという気持ちである。結果は中国の教育現場が出てくれると思う。

当教科書のもう一つの意義は、日本と中国との共同性にある。当教科書は異文化の壁を乗り越えての共同作業であった。日本人主導の面がなきにしもあらずだったが、中国側の献身的な協力がなかったら当教科書はできあがっていなかった。日本側が資金を出し中国人を単なる翻訳者として使うようなことでは真の協力関係は得られず、良い教科書もできない。自己の利益を考えずに中国での日本語教育の向上という理念を共有し著者に協力してくれた中国の方々へ感謝したい。

当教科書が日中友好の真の証となれば、著者として望外の喜びである。

注

- (1) 『新概念日語 I』脱稿後に日本語能力試験の出題基準の一部改訂がなされている。当教科書ではその改訂に合わせるができなかった。第2版で見直したい。
- (2) 今回は「(財) ラボ国際交流センター」と「凡人社」の2社の広告を載せた。
- (3) 全く未知の言語を習う際、自分であったらどのぐらい一度に覚えられるか試してみることを強く勧める。一つの課にどのぐらいの語彙を導入したらいいかという基準が自ずから分かるであろう。また、容易には覚え切れないぐらいの量を一遍に導入している教科書がいかにも多いかも気付くことであろう。
- (4) 『初級日本語』（東京外国語大学留学生日本語教育センター編、凡人社1990）の第22課において「Vてある」と「Vておく」が同時に導入されている。両者とも何かを〈準備する〉場面に使えるので学生が混乱しやすいことが認められる。このように混乱しやすい意味・用法をもつものは一緒に導入しない方がよい。
- (5) *Japanese: The Spoken Language Part I* (Jordan 他 1987) が一例となるだろう。
- (6) 『中級日本語』（東京外国語大学留学生日本語教育センター編、凡人社1994）の65頁に以下のような記述がある。

「1. あなたは、どちらの手で字を書きますか？

2. もし、もう一方の手がなかったとしたら、上手に字が書けると思えますか？」

これがどうして差別的なのかは、説明を要しないであろう。筆者は今まで片手が不自由な生徒を2名教えたことがある。彼らがこの文を読んだときの気持ちを考えると心が痛む。

参考文献

- 岡本佐智子・張群舟 (2000) 「中国における日本語教育の発展と定着に向けて」
本名信行・岡本佐智子編『アジアにおける日本語教育』三修社 pp.51-70.
- 楠本徹也 (1995) 「第二言語習得過程と教授法の整合性に関する一考察」『中国赴日留学生予備学校日本語教育論集』1 中国赴日留学生予備学校 pp.58-76.
- _____ (1996a) 「中国長春市における日本語教育の現状と分析」『東京外国語大学日本語教育センター論集』22 東京外国語大学留学生日本語教育セン

ター pp.151-165.

_____ (1996b) 「初級段階における不自然な日本語について」『中国赴日留学生予備学校日本語教育論集』2 中国赴日留学生予備学校 pp.49-68.

_____ (1999) 「ノダ文におけるノの認知作用に関する一考察」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』25 東京外国語大学留学生日本語教育センター pp.99-109.

楠本徹也・李若柏主編 (2002) 『新概念日語 I』北京出版社

国際交流基金ホームページ★「日本語教育国別情報」国別一覧《中国》★

(<http://www.jpf.go.jp/j/urawa/world/kunibetsu/1999/china.html>)

国際交流基金・(財)日本国際教育協会編 (1994) 『日本語能力試験出題基準』凡人社

白川博之 (2002) 「記述的研究と日本語教育－「語学的研究」の必要性と可能性－」『日本語文法 2 巻 2 号』日本語文法学会 pp.62-80.

人民教育出版社・光村図書出版株式会社合編 (1988) 『中日交流標準日本語初級上』

東京外国語大学留学生日本語教育センター編 (1990) 『初級日本語』凡人社

東京外国語大学留学生日本語教育センター編 (1994) 『中級日本語』凡人社

Eleanor Harz Jordan with M. Noda. (1987) *Japanese : The Spoken Language Part I*. Yale University Press.

◆ 第 1 课

第 1 课 你好！我姓张

【本课所学内容】

初次见面时该怎么寒暄呢？初次见面时，除对方是孩子外，通常都要使用郑重的说法。另外，应注意郑重的程度也会因对方不同而有所变化。

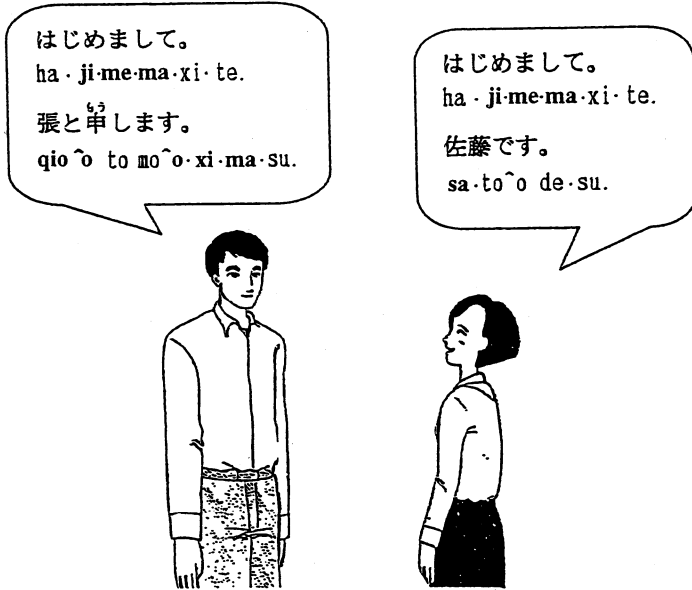
重点

- (1) ～と申します。[～to mo^o·xi·ma·su] “我叫～/我姓～。”
(2) ～です。[～de·su] “是～。”

【新出词汇】

- ① 張 [qio^o] (名) 张
※有代表性的中国人的姓：
王[o^o]“王”、李[liⁱ]“李”、趙[qio^o]“赵”、劉[liu^u]“刘”、
陳[qi·N]“陈”
- ② 佐藤 [sa·to^o] (名) 佐藤(日本人的姓)
※日本人中最多的姓，其次是「田中[ta·na·ka]+」[鈴木[su·zu·ki]+]等。
- ③ はじめまして。 [ha·ji·me·ma·xi·te] 初次见面。
- ④ ～です。 [～de·su] 是～。
※[de]的音与“～”最后的音为同一高度。
例:[qio^o de·su][ta·na·ka de·su]
- ⑤ ～と申します。 [～to mo^o·xi·ma·su] 我姓～/我叫～。
※[to mo]的音与“～”最后的音为同一高度。
例:[qio^o to mo^o·xi·ma·su] [ta·na·ka to mo^o·xi·ma·su]
- ⑥ よろしく [yo·lo·xi·ku]+ 请多(关照)
- ⑦ お願いします。 [o·ne·ga·i·xi·ma·su] 拜托了。
※よろしくお願いします。[yo·lo·xi·ku o·ne·ga·i·xi·ma·su]“请多关照。”
- ⑧ こちらこそ [ko·qi·la ko·so] 彼此彼此
- ⑨ どうぞよろしく。 [do^o·zo yo·lo·xi·ku] 请多关照。

【基本会话 1】



张：初次见面，我姓张。 佐藤：你好，初次见面。我是佐藤。

【解说】

(1) はじめまして。[ha·ji-me-ma·xi·te]“初次见面。”

初次见面时，相互间所用的寒暄语。

(2) ①～と申します。[~to mo^o·xi·ma·su]“(我)姓/叫～。”

②～です。[~de·su]“(我)是～。”

自报姓名时用此句型。日语里不说“我”。②的自谦程度略低，初次见面时最好使用①的句式。当对方已经知道自己的名字时(如：给熟人打电话等)，或办事务性的手续时，可使用②的句式。日本人在日常生活中一般只说姓，有关日本人的名字的说法可参考第二课。

(3) 关于中国人名字的读法

在日本，日本人通常根据汉字的音读来读中国人的名字。自己的名字用日语怎么读，问一下老师。对于日本人来说，外国人的名字不容易记住，所以在自报姓名时，一定要将日语的发音说清楚。

What An Expected Japanese Language Textbook Is Like-In Publishing *XINGAINIAN RIYU I (NEW CONCEPT JAPANESE I)*

KUSUMOTO, Tetsuya

This paper introduces a new Japanese language textbook, *XINGAINIAN RIYU I (NEW CONCEPT JAPANESE I)*, which was published in China in September of 2002, and then discusses what is required to be a good textbook.

XINGAINIAN RIYU I is characterized as follows: (1) focuses on natural, useful Japanese and presents it as dialogue; (2) controls vocabulary and grammar introduced in each lesson so that students can memorize them easily, and also makes explanations in the textbook easy for anyone to understand; (3) provides students with valuable information on Japanese culture and society in comparison with Chinese ones; (4) deals with topics familiar to students; (5) prepares for the Japanese Language Aptitude Exam. Then how *XINGAINIAN RIYU I* is structured is explained in detail.

What a Japanese language textbook ought to be is discussed. First, the number of vocabulary and grammatical items introduced in each lesson should be limited and Japanese in the textbook should be presented natural and up-to-date. Secondly, systematic introduction of grammatical items is required in accordance with the student's process of learning and capacity for acquisition. The third thing to be considered is to arrange the layout and content of the textbook to have students comfortably accept them. It is important to note that any type of expressions which induce stereotype, prejudice and discrimination should be avoided. Lastly, the importance of effectiveness of the textbook in the process of learning is discussed.

XINGAINIAN RIYU I has some misprints owing to technical problems of editing and printing. It should have been proofread with religious care. It is, however, noted that the significance of this textbook lies in the fact that it is edited and published without receiving any organizational funds. Most important is that this textbook is completed by the united efforts of the Japanese and Chinese people. It is hoped that this textbook will promote a friendship cross-culturally.